

芸術鑑賞の習慣化についての実態調査

独立行政法人日本芸術文化振興会 企画部 基金・助成事務局 調査研究課
令和 7 年 7 月

目次

調査概要	1
目的	1
調査方法	1
分析方法	2
調査結果	4
調査結果一覧	4
性年齢との関連性	5
性別との関連性	5
年齢との関連性	6
経済資本との関連性	8
収入との関連性	8
職業（雇用形態）との関連性	10
正規雇用と非正規雇用の比較	11
労働力人口と非労働力人口の比較	12
居住地との関連性	14
居住地との関連性	14
生活圏との関連性	15
文化資本との関連性	17
「家庭」で獲得した文化資本との関連性	17
「学校」で獲得した文化資本との関連性	22
学歴との関連性	24
まとめ	25

調査概要

目的

本調査は、芸術鑑賞を習慣的に行う人たちに注目し、その特徴について少しでも多くの知見を得ることを目的とするものである。芸術文化の振興として目指されるべき状態のひとつに、芸術鑑賞を習慣的に行う人たちの増加、が挙げられる。能動的に繰り返し自ら鑑賞を楽しむ人たちが社会において増加する、という変化こそが、芸術文化が社会に根付いていくということであり、文化振興の一端を担う独立行政法人日本芸術文化振興会（以下、振興会）として目指すべき状態のひとつでもある。そこで、本調査では芸術鑑賞を習慣的に行う人たちに注目し、その特徴を多面的に捉えることを目指す。

習慣的に芸術鑑賞を行う人たちのなかでも、今回は特に、正統性の高い芸術ジャンルを習慣的に鑑賞する人たちに注目する。本報告書における「正統性の高い芸術ジャンル」とは、その文化的な歴史性を背景に、鑑賞に一定程度の経験と知識を要するとされる文化芸術―「美術（絵画、彫刻など）」「現代美術・現代アート」「クラシック音楽（オーケストラ、オペラなど）」「演劇」「落語・講談など」「伝統芸能（歌舞伎、能・狂言など）」「バレエ・コンテンポラリーダンスなど」「純文学」など―のことを指す（したがってここでいう「正統性の高い芸術」とは必ずしも「優れた芸術」を意味するわけではないことには注意されたい）。振興会の助成事業の対象となっている芸術ジャンルの多くがこれらに含まれることから、今回、それら正統性の高い芸術ジャンルを習慣的に鑑賞する人たちの特徴を分析することとした。

調査方法

以下のとおり、アンケート調査を実施した。

図表 1 アンケート調査概要

調査対象者	満 18 歳以上の日本国籍を有する者
回収サンプル数とその構成	3,000。性別（男女）、年齢（18-19 歳・20 代・30 代・40 代・50 代・60 代・70 代）、居住地（北海道・東北・北関東・南関東・東海・北陸・近畿・中国・四国・九州・沖縄）によるセグメント分けを行い、日本の人口比率を再現するかたちで構成した。 ※不備があったため使用したサンプル数は 2,995
回収の方法	調査会社に委託した。調査会社は自身の保有するモニターに今回の調

	査票をインターネット上で配布し、上記の調査対象者、回収サンプル数とその構成を満たすよう回収を行った。
配布・回収期間	2024 年 4 月 22 日～2024 年 4 月 26 日
調査会社	株式会社サーベイリサーチセンター

※ローデータ・単純集計表・クロス集計表は別途公開している。
調査票の設問内容もそちらを参照。

分析方法

ローデータをまず以下 3 つの鑑賞者のタイプに分類した。分類に際しては、問 2 に対する回答のパターンを使用した。問 2 では、各芸術ジャンルについて、それぞれの鑑賞頻度を尋ねている。各タイプの実数および構成比は、以下のとおりである。

図表 2 鑑賞者の分類

	全体	正統性の高い芸術 ジャンルを習慣的 に鑑賞する人	大衆的な芸術ジャ ンルのみを習慣的 に鑑賞する人	何も鑑賞しない人
実数	2995	445	1648	902
構成比	100.0%	14.9%	55.0%	30.1%

【正統性の高い芸術ジャンルを習慣的に鑑賞する人】（以後、「正統習慣」と表記）

「正統性の高い芸術ジャンル」のいずれか 1 つ以上に関して、それを月 1 回以上の頻度で鑑賞する人を指す。なお「正統性の高い芸術ジャンル」とは、前述の通り、今回は「美術（絵画、彫刻など）」「現代美術・現代アート」「クラシック音楽（オーケストラ、オペラなど）」「演劇」「落語・講談など」「伝統芸能（歌舞伎、能・狂言など）」「バレエ・コンテンポラリーダンスなど」「純文学」をここに含めた。また、「習慣的である」ことの基準として、今回は月 1 回以上という頻度を採用した。ある芸術ジャンルを習慣的に鑑賞しているということはそれがその人の「趣味になっている」ということであり、趣味と判断する鑑賞頻度としては最低月 1 回という頻度が妥当であると考えたためである。

【大衆的な芸術ジャンルのみを習慣的に鑑賞する人】（以後、「大衆のみ習慣」と表記）

「正統性の高い芸術ジャンル」を習慣的には全く鑑賞せず、「大衆的な芸術ジャンル」のいずれか 1 つ以上を、月 1 回以上の頻度で鑑賞する人を指す。なお「大衆的な芸術ジャンル」とは、「正統性の高い芸術ジャンル」として挙げた以外の、一般に娯楽的な性格が強い

と認知されている芸術ジャンルのことであり、「映画（アニメーション映画を含む）」「アニメ」「軽音楽（ポップス、ロックなど）」「ミュージカル」「漫才・コントなど」「ストリートダンス・ジャズダンスなど」「大衆文学」「漫画」を今回はここに含めた。

【何も鑑賞しない人】（以後、「無習慣」と表記）

正確には何も「習慣的には」鑑賞しない人のことであり、いずれの芸術ジャンルに関しても、それを月1回以上の頻度で鑑賞することがない人を指す。

以上3つの鑑賞者のタイプと各設問への回答をクロスし、比較することで、「正統性の高い芸術ジャンルを習慣的に鑑賞する人」の特徴を明らかにしていく。

調査結果

調査結果一覧

まず、分析の結果獲得された知見を、以下一覧にまとめて示す。

図表 3 調査結果一覧

	正統性の高い芸術ジャンルを習慣的に鑑賞する人たち	大衆的な芸術ジャンルのみを習慣的に鑑賞する人たち
性年齢	・男女どちらかに偏って多いということはない。 ・年代間の分布が一定であり、その習慣的な鑑賞が生涯の趣味になっていると考えられる。	・どちらかというと男性に偏って多い。 ・30代で分布の割合が最も大きく、それ以降年代を経るにしたがって分布の割合が小さくなっていく。年齢を経るにしたがって、だんだんと「何も鑑賞しない」という芸術との関わり方にシフトしていくと考えられる。
経済資本	・収入の多寡と分布割合の大きさとの間に関連性がない。つまり、単純な経済資本の増加それ自体には、正統性の高い芸術ジャンルの鑑賞の習慣化を促す効果はないと考えられる。 ・「労働力人口」と「非労働力人口」とで分布割合の大きさに差を確認することができない。つまり、余暇時間の多さそれ自体には、正統性の高い芸術ジャンルの鑑賞の習慣化を促す効果はないと考えられる。	・収入の多寡と分布割合の大きさとの間に関連性がある。単純な経済資本の増加には、大衆的な芸術ジャンルの鑑賞の習慣化を促す効果があると考えられる。
居住地	・文化資源が豊かな都市の生活圏（「東京特別区（東京23区）生活圏」「大都市（8都市）生活圏」「県庁所在都市生活圏」）により多く分布している。	・どの都市、どの生活圏にもほぼ同じ割合で分布している。都市や生活圏が保有する文化資源の多寡とは関係なく、それとは独立して、大衆的な芸術ジャンルの鑑賞の習慣化は達成される傾向にある、と考えられる。
文化資本	・子どもの頃の家庭での文化的経験が豊かであればあるほど、その後正統性の高い芸術ジャンルの鑑賞の習慣化に至りやすい、そういう傾向があると考えられる。 ・育った家庭が保有する文化的財が豊かであればあるほど、その後正統性の高い芸術ジャンルの鑑賞の習慣化に至りやすい、そういう傾向があると考えられる。 ・学校での獲得文化資本が「上の方」である場合、それ以外の場合に比べ、その後正統性の高い芸術ジャンルの鑑賞の習慣化に至りやすい、そういう傾向があると考えられる。 ・高い学歴を獲得している人ほど、それと同時に正統性の高い芸術ジャンルの鑑賞の習慣化に至っている、そういう傾向がある。	

性年齢との関連性

調査結果一覧に掲載した性年齢との関連性について、以下、性別と年齢に分けて詳述する。

性別との関連性

図表 4 性別との関連性

	全体	正統習慣	大衆のみ習慣	無習慣
全体	2995	445	1648	902
	100.0%	14.9%	55.0%	30.1%
男性	1484	229	865	390
	100.0%	15.4%	58.3%	26.3%
女性	1511	216	783	512
	100.0%	14.3%	51.8%	33.9%

- 性別別に鑑賞者タイプの分布を確認すると、「正統習慣」は、男性で 15.4%、女性で 14.3% となっており、男女の間でその分布割合の大きさに差を確認することができない¹。つまり、「正統習慣」は、男女どちらかに偏って多いということはない。
- 「大衆のみ習慣」は、男性で 58.3%、女性で 51.8% となっており、男性でその分布の割合が大きい²。つまり「大衆のみ習慣」は、どちらかというと男性に多い。
- 「無習慣」は、男性で 26.3%、女性で 33.9% となっており、女性でその分布の割合が大きい³。つまり「無習慣」は、どちらかというと女性に多い。

¹ 表側カテゴリー「男性」「女性」、表頭カテゴリー「正統習慣」「正統習慣なし（「大衆のみ習慣」と「無習慣」の合算）」の 2×2 のクロス表に対してカイ二乗検定を行った（自由度 1、有意水準 0.05 で、カイ二乗分布 C は 3.84）。カイ二乗値 = 0.764 < C。よって男女間に見られる「正統習慣」の分布割合の大きさの違いは、有意な差であるとはいえない。

² 表側カテゴリー「男性」「女性」、表頭カテゴリー「大衆のみ習慣」「それ以外（「正統習慣」と「無習慣」の合算）」の 2×2 のクロス表に対してカイ二乗検定を行った（自由度 1、有意水準 0.05 で、カイ二乗分布 C は 3.84）。カイ二乗値 = 12.7 > C。よって男女間に見られる「大衆のみ習慣」の分布割合の大きさの違いは、有意な差であるといえる。

³ 表側カテゴリー「男性」「女性」、表頭カテゴリー「無習慣」「それ以外（「正統習慣」と「大衆のみ習慣」の合算）」の 2×2 のクロス表に対してカイ二乗検定を行った（自由度 1、有意水準 0.05 で、カイ二乗分布 C は 3.84）。カイ二乗値 = 20.6 > C。よって男女間に見られる「無習慣」の分布割合の大きさの違いは、有意な差であるといえる。

年齢との関連性

図表 5 年齢との関連性

	全体	正統習慣	大衆のみ習慣	無習慣
全体	2995	445	1648	902
	100.0%	14.9%	55.0%	30.1%
18歳～19歳	75	17	50	8
	100.0%	22.7%	66.7%	10.7%
20代	363	58	229	76
	100.0%	16.0%	63.1%	20.9%
30代	437	56	303	78
	100.0%	12.8%	69.3%	17.8%
40代	574	69	374	131
	100.0%	12.0%	65.2%	22.8%
50代	525	68	300	157
	100.0%	13.0%	57.1%	29.9%
60代	501	71	235	195
	100.0%	14.2%	46.9%	38.9%
70代	520	106	157	257
	100.0%	20.4%	30.2%	49.4%

※区分「18歳～19歳」はサンプル数が少ないため、分析の対象から除外した。

- 年代別に鑑賞者タイプの分布を確認すると、「正統習慣」は、70代で分布の割合がやや大きくなっているものの、20代から60代にかけてはその分布割合の大きさに差を確認することができない⁴。つまり年代間の分布が一定ということであり、このことは「正統習慣」では、年齢を経たのちに習慣化に至る人の数は多くはなく、一度習慣化に至った人のほとんどが、その習慣的な鑑賞を生涯の趣味としている。ということを示していると考えられる。「大衆のみ習慣」の分布の割合が年代を経るにしたがって減っていく、つまり鑑賞から疎遠になっていくのに対し、「正統習慣」の年代別の分布割合にはそのような変動が見られない。

- 「大衆のみ習慣」は、30代をピークに、それ以降だんだんとその分布割合は小さくな

⁴ 表側カテゴリー「20代」「30代」「40代」「50代」「60代」、表頭カテゴリー「正統習慣」「正統習慣なし（「大衆のみ習慣」と「無習慣」の合算）」の5×2のクロス表に対してカイ二乗検定を行った（自由度4、有意水準0.05で、カイ二乗分布Cは9.49）。カイ二乗値 = 6.20 < C。よって20代から60代にかけての年代間に見られる「正統習慣」の分布割合の大きさの違いは、有意な差であるとはいえない。

っていく。対照的に「無習慣」は、30代で底を打った後、それ以降その分布割合がどんどん大きくなっていく。「正統習慣」の分布割合が年代間で一定であることを加味すると、「大衆のみ習慣」は、年齢を経るにしたがってだんだんと「無習慣」という芸術との関わり方にシフトしていくのではないかと考えられる。

- なお、60代、70代といった高齢層に関しては、若い頃に大衆的な芸術ジャンルに触れる機会が少なく、それゆえに習慣化に至っている人の割合が他の世代に比べて少ないのではないかと解釈することもできる。しかし、現在ほどではないにせよ、60代、70代が若い頃にも大衆的な芸術ジャンルは十分身近に存在していたと考えられるため、そうした「世代効果」による解釈ではなく、大衆的な芸術ジャンルそれ自体が持つ性格に注目した解釈をここでは採用した。つまり、大衆的な芸術ジャンルは、時代や流行を反映しながら自身の新しさを更新していくという性格ゆえに、いつの時代にあっても高齢層に対して斥力を発揮してしまう。その影響が「世代効果」よりも大きいのではないかと。そのような解釈のもと、前述した「年齢効果」による解釈を今回は採用した。

経済資本との関連性

調査結果一覧に掲載した経済資本との関連性について、以下、収入、職業（雇用形態）に分けて詳述するとともに、正規雇用と非正規雇用の比較、また労働力人口と非労働力人口の比較を通した分析を試みる。

収入との関連性

図表 6 収入との関連性

	全体	正統習慣	大衆のみ習慣	無習慣
全体	2995	445	1648	902
	100.0%	14.9%	55.0%	30.1%
100万円未満	106	18	57	31
	100.0%	17.0%	53.8%	29.2%
100万円以上～ 200万円未満	186	32	89	65
	100.0%	17.2%	47.8%	34.9%
200万円以上～ 300万円未満	286	52	150	84
	100.0%	18.2%	52.4%	29.4%
300万円以上～ 400万円未満	366	61	194	111
	100.0%	16.7%	53.0%	30.3%
400万円以上～ 500万円未満	305	45	165	95
	100.0%	14.8%	54.1%	31.1%
500万円以上～ 600万円未満	240	34	144	62
	100.0%	14.2%	60.0%	25.8%
600万円以上～ 700万円未満	207	30	133	44
	100.0%	14.5%	64.3%	21.3%
700万円以上～ 800万円未満	169	25	101	43
	100.0%	14.8%	59.8%	25.4%
800万円以上～ 900万円未満	144	22	84	38
	100.0%	15.3%	58.3%	26.4%
900万円以上～ 1,000万円未満	93	16	49	28
	100.0%	17.2%	52.7%	30.1%
1,000万円以上	245	50	143	52
	100.0%	20.4%	58.4%	21.2%
わからない	648	60	339	249
	100.0%	9.3%	52.3%	38.4%

※区分「900万円以上～1,000万円未満」はサンプル数が少ないため、分析の対象から除外した。

- 年収別に鑑賞者タイプの分布を確認すると、「正統習慣」は、年収区分間でその分布割合の大きさに差を確認することができない⁵。つまり収入の多寡と「正統習慣」の分布割合の大きさとの間には、関連性がないといえる。このことから、単純な経済資本の増加それ単体には、正統性の高い芸術ジャンルの鑑賞の習慣化を促す効果はないと考えられる。
- 「大衆のみ習慣」は、「500 万円未満」では 52~54%程度である分布割合が、「500 万円以上」では 60%前後で推移しており、年収 500 万円を境に、それ以上とそれ以下の区分とで分布割合の大きさに差を確認することができる⁶。つまり収入の多寡と「大衆のみ習慣」との間には、関連性があるといえる。さらに、500 万円を境に、「無習慣」の分布の割合が、「大衆のみ習慣」とは対照的に小さくなることも加味すると、単純な経済資本の増加には、大衆的な芸術ジャンルの鑑賞の習慣化を促す効果があると考えられる。単純な金銭的余裕がもたらすのは、大衆的な芸術ジャンルを鑑賞する、という鑑賞習慣であって、金銭的な余裕が増しただけでは、正統性の高い芸術ジャンルを鑑賞する、という鑑賞習慣の形成が促されることはないといえる。

⁵ 表側カテゴリー各年収区分（「900 万円以上～1,000 万円未満」と「わからない」を除く）、表頭カテゴリー「正統習慣」「正統習慣なし（「大衆のみ習慣」と「無習慣」の合算）」の 10×2 のクロス表に対してカイ二乗検定を行った（自由度 9、有意水準 0.05 で、カイ二乗分布 C は 16.92）。カイ二乗値 = 6.15 < C。よって年収区分間に見られる「正統習慣」の分布割合の大きさの違いは、有意な差であるとはいえない。

⁶ 表側カテゴリー「500 万円未満」「500 万円以上」、表頭カテゴリー「大衆のみ習慣」「それ以外（「正統習慣」と「無習慣」の合算）」の 2×2 のクロス表に対してカイ二乗検定を行った（自由度 1、有意水準 0.05 で、カイ二乗分布 C は 3.84）。カイ二乗値 = 13.6 > C。よって「年収 500 万円未満」と「年収 500 万円以上」の間に見られる「大衆のみ習慣」の分布割合の大きさの違いは、有意な差であるといえる。

職業（雇用形態）との関連性

図表 7 職業（雇用形態）との関連性

	全体	正統習慣	大衆のみ習慣	無習慣
全体	2995	445	1648	902
	100.0%	14.9%	55.0%	30.1%
経営者、役員	80	16	44	20
	100.0%	20.0%	55.0%	25.0%
常時雇用されている 一般従業員	1129	153	710	266
	100.0%	13.6%	62.9%	23.6%
パートアルバイト、 臨時雇用	485	58	268	159
	100.0%	12.0%	55.3%	32.8%
派遣社員	66	12	43	11
	100.0%	18.2%	65.2%	16.7%
契約社員、嘱託	117	14	69	34
	100.0%	12.0%	59.0%	29.1%
自営業主、自由業者 （自分で、または共同で事業 を営んでいる）	143	29	78	36
	100.0%	20.3%	54.5%	25.2%
家族従業者 （家族が営んでいる事業を手 伝っている）	14	3	7	4
	100.0%	21.4%	50.0%	28.6%
内職	4	0	3	1
	100.0%	0.0%	75.0%	25.0%
学生	91	21	58	12
	100.0%	23.1%	63.7%	13.2%
主婦・主夫	391	66	154	171
	100.0%	16.9%	39.4%	43.7%
無職	449	66	200	183
	100.0%	14.7%	44.5%	40.8%
その他	26	7	14	5
	100.0%	26.9%	53.8%	19.2%

※区分「家族従業者」「内職」はサンプル数が少ないため、分析の対象から除外した。

- 雇用形態別に鑑賞者タイプの分布を確認すると、「正統習慣」は、「経営者、役員」(20.0%)と「自営業主、自由業者」(20.3%)で、その分布の割合が大きい。

正規雇用と非正規雇用の比較

図表 8 正規雇用と非正規雇用の比較

	全体	正統習慣	大衆のみ習慣	無習慣
全体	2995	445	1648	902
	100.0%	14.9%	55.0%	30.1%
常時雇用されている 一般従業員（正規雇用）	1129	153	710	266
	100.0%	13.6%	62.9%	23.6%
非正規雇用計	668	84	380	204
	100.0%	12.6%	56.9%	30.5%
パートアルバイト、 臨時雇用	485	58	268	159
	100.0%	12.0%	55.3%	32.8%
派遣社員	66	12	43	11
	100.0%	18.2%	65.2%	16.7%
契約社員、嘱託	117	14	69	34
	100.0%	12.0%	59.0%	29.1%

※正規雇用と非正規雇用との比較を、それぞれ区分「常時雇用されている一般従業員」と区分「パートアルバイト、臨時雇用」「派遣社員」「契約社員、嘱託」の合算とを用いて行った。

- 「正規雇用（「経営者、役員」を除く）」と「非正規雇用」で鑑賞者タイプの分布の違いを確認すると、「正統習慣」は、「正規雇用」で 13.6%、「非正規雇用」で 12.6%となっており、両者の間でその分布割合の大きさに差を確認することができない⁷。一方、「大衆のみ習慣」は、「正規雇用」で 62.9%、「非正規雇用」で 56.9%となっており、「正規雇用」でその分布の割合が大きい⁸。「正規雇用」と「非正規雇用」とでは一般に収入に差が見られ、「正規雇用」で働く人たちのほうが収入は高く、経済的に安定している。このことを踏まえると、経済的な安定がもたらすのは「大衆のみ習慣」の分布割合の増加であり、収入との関連性で確認したときと同様、経済的な安定がもたらすのは大衆的な芸術ジャンルの鑑賞の習慣化であり、正統性の高い芸術ジャンルの鑑賞の習慣化は、

⁷ 表側カテゴリー「正規雇用」「非正規雇用」、表頭カテゴリー「正統習慣」「正統習慣なし（「大衆のみ習慣」と「無習慣」の合算）」の 2×2 のクロス表に対してカイニ乗検定を行った（自由度 1、有意水準 0.05 で、カイニ乗分布 C は 3.84）。カイニ乗値 = 0.35 < C。よって「正規雇用」と「非正規雇用」の間に見られる「正統習慣」の分布割合の大きさの違いは、有意な差であるとはいえない。

⁸ 表側カテゴリー「正規雇用」「非正規雇用」、表頭カテゴリー「大衆のみ習慣」「それ以外（「正統習慣」と「無習慣」の合算）」の 2×2 のクロス表に対してカイニ乗検定を行った（自由度 1、有意水準 0.05 で、カイニ乗分布 C は 3.84）。カイニ乗値 = 6.33 > C。よって「正規雇用」と「非正規雇用」の間に見られる「大衆のみ習慣」の分布割合の大きさの違いは、有意な差であるといえる。

経済的な安定それのみによってはもたらされることはない、と考えられる。

労働力人口と非労働力人口の比較

図表 9 労働力人口と非労働力人口の比較

		全体	正統習慣	大衆のみ習慣	無習慣
全体		2995	445	1648	902
		100.0%	14.9%	55.0%	30.1%
労働力人口		2038	285	1222	531
		100.0%	14.0%	60.0%	26.1%
	経営者、役員	80	16	44	20
		100.0%	20.0%	55.0%	25.0%
	常時雇用されている 一般従業員	1129	153	710	266
		100.0%	13.6%	62.9%	23.6%
	パートアルバイト、 臨時雇用	485	58	268	159
		100.0%	12.0%	55.3%	32.8%
	派遣社員	66	12	43	11
		100.0%	18.2%	65.2%	16.7%
	契約社員、嘱託	117	14	69	34
		100.0%	12.0%	59.0%	29.1%
	自営業主、自由業者 (自分で、または共同で事業 を営んでいる)	143	29	78	36
		100.0%	20.3%	54.5%	25.2%
	家族従業者 (家族が営んでいる事業を手 伝っている)	14	3	7	4
		100.0%	21.4%	50.0%	28.6%
	内職	4	0	3	1
		100.0%	0.0%	75.0%	25.0%
非労働力人口		931	153	412	366
		100.0%	16.4%	44.3%	39.3%
	学生	91	21	58	12
		100.0%	23.1%	63.7%	13.2%
	主婦・主夫	391	66	154	171
		100.0%	16.9%	39.4%	43.7%
	無職	449	66	200	183
		100.0%	14.7%	44.5%	40.8%

※非労働力人口には「学生」「主婦・主夫」「無職」が、労働力人口にはそれら以外の区分が含まれる。

- 「労働力人口」と「非労働力人口」で鑑賞者タイプの分布の違いを確認すると、「正統習慣」は、「労働力人口」で 14.0%、「非労働力人口」で 16.4%となっており、両者の間でその分布割合の大きさに差を確認することができない⁹。一般に「労働力人口」に比べ、「非労働力人口」のほうが余暇時間を多く有しているという実態を踏まえると、余暇時間の多さそれ自体には、正統性の高い芸術ジャンルの鑑賞の習慣化を促す効果はないと考えられる。
- 「大衆のみ習慣」は、「非労働力人口」でその分布の割合が小さくなっている。これは、「非労働力人口」のほぼ半数を「無職」が占めており、その「無職」の大多数をおそらく退職した高齢者が占めているためと考えられる。年齢との関連性で見たように、年齢を重ねるにつれ「大衆のみ習慣」の分布割合は小さくなっていく。高齢者比率の高い「非労働力人口」ではその傾向が強く反映され、「大衆のみ習慣」の分布割合が小さくなっているのだと考えられる。

⁹ 表側カテゴリー「労働力人口」「非労働力人口」、表頭カテゴリー「正統習慣」「正統習慣なし（「大衆のみ習慣」と「無習慣」の合算）」の2×2のクロス表に対してカイ二乗検定を行った（自由度 1、有意水準 0.05 で、カイ二乗分布 C は 3.84）。カイ二乗値 = 3.05 < C。よって「労働力人口」と「非労働力人口」の間に見られる「正統習慣」の分布割合の大きさの違いは、有意な差であるとはいえない。

居住地との関連性

調査結果一覧に掲載した居住地との関連性について、以下、居住地、生活圏に分けて詳述する。

居住地との関連性

図表 10 居住地との関連性

	全体	正統習慣	大衆のみ習慣	無習慣
全体	2995	445	1648	902
	100.0%	14.9%	55.0%	30.1%
東京特別区 (東京23区)	246	45	128	73
	100.0%	18.3%	52.0%	29.7%
大都市（8都市）	478	61	253	164
	100.0%	12.8%	52.9%	34.3%
人口が20万人以上、かつ 県庁所在地の都市	502	85	280	137
	100.0%	16.9%	55.8%	27.3%
人口が20万人以上、かつ 県庁所在地ではない都市	581	86	315	180
	100.0%	14.8%	54.2%	31.0%
人口が10万人以上 20万人未満の都市	466	70	255	141
	100.0%	15.0%	54.7%	30.3%
人口が10万人未満の都市	722	98	417	207
	100.0%	13.6%	57.8%	28.7%

※大都市（8都市）とは、ここでは京都市、大阪市、横浜市、神戸市、名古屋市、札幌市、福岡市、仙台市を指す。

- 居住都市別に鑑賞者タイプの分布を確認すると、「正統習慣」は、居住都市区分間でその分布割合の大きさに差を確認することができない¹⁰。つまり、居住都市が保有している文化資源の多寡（文化施設やそれによって確保される鑑賞機会）と、「正統習慣」の分布割合の大きさとの間には、関連性がないといえる。

¹⁰ 表側カテゴリー各居住都市区分、表頭カテゴリー「正統習慣」「正統習慣なし（「大衆のみ習慣」と「無習慣」の合算）」の6×2のクロス表に対してカイ二乗検定を行った（自由度 5、有意水準 0.05 で、カイ二乗分布 C は 11.07）。カイ二乗値 = 6.62 < C。よって居住都市区分間に見られる「正統習慣」の分布割合の大きさの違いは、有意な差であるとはいえない。たとえば文化資源を最も豊富に保有していると考えられる「東京特別区（東京 23 区）」では 18.3%と分布の割合は最も高くなっているものの、これも他の区分に対して有意な差ではないといえる。

- 「大衆のみ習慣」も、居住都市区分間でその分布割合の大きさに差を確認することができない¹¹。つまり、居住都市が保有している文化資源の多寡と、「大衆のみ習慣」の分布割合の大きさとの間には、関連性がないといえる。このことは、居住している都市が保有している文化資源の多寡とは関係なく、それとは独立して大衆的な芸術ジャンルの鑑賞の習慣化は達成される傾向にある、ということを示していると考えられる。

生活圏との関連性

図表 11 生活圏との関連性

	全体	正統習慣	大衆のみ習慣	無習慣
全体	2995	445	1648	902
	100.0%	14.9%	55.0%	30.1%
東京特別区 (東京23区) 生活圏	673	134	351	188
	100.0%	19.9%	52.2%	27.9%
大都市 (8都市) 生活圏	869	133	462	274
	100.0%	15.3%	53.2%	31.5%
県庁所在都市生活圏	615	109	354	152
	100.0%	17.7%	57.6%	24.7%
上記いずれからも圏外	838	69	481	288
	100.0%	8.2%	57.4%	34.4%

※「東京特別区（東京 23 区）生活圏」は、東京特別区（東京 23 区）居住者と東京特別区（東京 23 区）が通勤通学圏内の人たちの合算。「大都市（8 都市）生活圏」は、大都市（8 都市）居住者と大都市（8 都市）が通勤通学圏内の人たちの合算。「県庁所在都市生活圏」は、県庁所在都市居住者と県庁所在都市が通勤通学圏内の人たちの合算を指す。要するに居住都市が保有している以外の文化資源へのアクセス可能性も加味し、生活圏という以上のような区分を作成した。

- 生活圏別に鑑賞者タイプの分布を確認すると、「正統習慣」は、「東京特別区（東京 23 区）生活圏」で 19.9%、「大都市（8 都市）生活圏」で 15.3%、「県庁所在都市生活圏」

¹¹ 表側カテゴリー各居住都市区分、表頭カテゴリー「大衆のみ習慣」「それ以外（「正統習慣」と「無習慣」の合算）」の 6×2 のクロス表に対してカイニ乗検定を行った（自由度 5、有意水準 0.05 で、カイニ乗分布 C は 11.07）。カイニ乗値 = 4.20 < C。よって居住都市区分間に見られる「大衆のみ習慣」の分布割合の大きさの違いは、有意な差であるとはいえない。

で 17.7%となっており、この 3 区分間でその分布割合の大きさに差を確認することができない¹²。つまり、これら 3 つの区分の間にあると想定される文化資源の多寡と、「正統習慣」の分布割合の大きさとの間には、関連性がないといえる。

- ただし、文化資源が豊かな生活圏（「東京特別区（東京 23 区）生活圏」「大都市（8 都市）生活圏」「県庁所在都市生活圏」）と「上記のいずれからも圏外」とでは、「正統習慣」の分布割合の大きさに差を確認することができる¹³。つまり、これらの区分間にあると想定される文化資源の多寡と、「正統習慣」の分布の大きさとの間には、関連性があるといえる。「正統習慣」は、文化資源が豊かな都市の生活圏（「東京特別区（東京 23 区）生活圏」「大都市（8 都市）生活圏」「県庁所在都市生活圏」）に、より多く分布している。
- 「大衆のみ習慣」は、居住地との関連性で確認したときと同様、生活圏区分間でもその分布割合の大きさに差を確認することができない¹⁴。つまり、生活圏が保有している文化資源の多寡と、「大衆のみ習慣」の分布割合の大きさとの間には、関連性がないといえる。このことは、生活圏の保有している文化資源の多寡とは関係なく、それとは独立して大衆的な芸術ジャンルの鑑賞の習慣化は達成される傾向にある、ということを示していると考えられる。

¹² 表側カテゴリー「東京特別区（東京 23 区）生活圏」「大都市（8 都市）生活圏」「県庁所在都市生活圏」、表頭カテゴリー「正統習慣」「正統習慣なし（「大衆のみ習慣」と「無習慣」の合算）」の 3×2 のクロス表に対してカイ二乗検定を行った（自由度 2、有意水準 0.05 で、カイ二乗分布 C は 5.99）。カイ二乗値 = 5.64 < C。よってこの 3 区分間に見られる「正統習慣」の分布割合の大きさの違いは、有意な差であるとはいえない。たとえば文化資源が最も豊富であると考えられる「東京特別区（東京 23 区）生活圏」では 19.9%と分布の割合は最も高くなっているものの、これも他の区分に対して有意な差ではないといえる。

¹³ 表側カテゴリー「文化資源が豊かな生活圏（「東京特別区（東京 23 区）生活圏」「大都市（8 都市）生活圏」「県庁所在都市生活圏」の合算）」「上記のいずれからも圏外」、表頭カテゴリー「正統習慣」「正統習慣なし（「大衆のみ習慣」と「無習慣」の合算）」の 2×2 のクロス表に対してカイ二乗検定を行った（自由度 1、有意水準 0.05 で、カイ二乗分布 C は 3.84）。カイ二乗値 = 40.4 > C。よって文化資源が豊かな生活圏（「東京特別区（東京 23 区）生活圏」「大都市（8 都市）生活圏」「県庁所在都市生活圏」）と「上記のいずれからも圏外」の間に見られる「正統習慣」の分布割合の大きさの違いは、有意な差であるといえる。

¹⁴ 表側カテゴリー各生活圏区分、表頭カテゴリー「大衆のみ習慣」「それ以外（「正統習慣」と「無習慣」の合算）」の 4×2 のクロス表に対してカイ二乗検定を行った（自由度 3、有意水準 0.05 で、カイ二乗分布 C は 7.81）。カイ二乗値 = 6.96 < C。よって生活圏区分間に見られる「大衆のみ習慣」の分布割合の大きさの違いは、有意な差であるとはいえない。

文化資本との関連性

調査結果一覧に掲載した文化資本との関連性について、以下、「家庭」で獲得した文化資本と「学校」で獲得した文化資本に分けて詳述し、最後に学歴との関連性について示す。なお、ここでの文化資本とは、文化的な資源を意味し、特に個人が獲得する芸術に関する文化的な素養のことを指している。

「家庭」で獲得した文化資本との関連性

まず、調査票の設問「Q4.小学生の頃、家でクラシック音楽のレコードやCDをきいたり、家族とクラシック音楽のコンサートに出かけたりすることがありましたか」、「Q5.小学生の頃、家族につれられて美術館や博物館に行ったことがありましたか」、「Q6.子どもの頃、家族の誰かがあなたに本を読んでくれましたか」について、回答の集計結果および考察を以下に示す。

図表 12 「Q4.小学生の頃、家でクラシック音楽のレコードやCDをきいたり、家族とクラシック音楽のコンサートに出かけたりすることがありましたか」に対する回答の集計結果

	全体	正統習慣	大衆のみ習慣	無習慣
全体	2995	445	1648	902
	100.0%	14.9%	55.0%	30.1%
よくあった	132	56	57	19
	100.0%	42.4%	43.2%	14.4%
ときどきあった	469	126	243	100
	100.0%	26.9%	51.8%	21.3%
あまりなかった	489	82	273	134
	100.0%	16.8%	55.8%	27.4%
まったくなかった	1677	165	958	554
	100.0%	9.8%	57.1%	33.0%
わからない／覚えていない	228	16	117	95
	100.0%	7.0%	51.3%	41.7%

図表 13「Q5.小学生の頃、家族につれられて美術館や博物館に行ったことがありましたか」に対する回答の集計結果

	全体	正統習慣	大衆のみ習慣	無習慣
全体	2995	445	1648	902
	100.0%	14.9%	55.0%	30.1%
よくあった	103	44	49	10
	100.0%	42.7%	47.6%	9.7%
ときどきあった	639	139	365	135
	100.0%	21.8%	57.1%	21.1%
あまりなかった	743	125	417	201
	100.0%	16.8%	56.1%	27.1%
まったくなかった	1271	121	702	448
	100.0%	9.5%	55.2%	35.2%
わからない／ 覚えていない	239	16	115	108
	100.0%	6.7%	48.1%	45.2%

図表 14「Q6.子どもの頃、家族のだれかがあなたに本を読んでもらいましたか」に対する回答の集計結果

	全体	正統習慣	大衆のみ習慣	無習慣
全体	2995	445	1648	902
	100.0%	14.9%	55.0%	30.1%
よくあった	491	110	285	96
	100.0%	22.4%	58.0%	19.6%
ときどきあった	930	166	532	232
	100.0%	17.8%	57.2%	24.9%
あまりなかった	653	84	369	200
	100.0%	12.9%	56.5%	30.6%
まったくなかった	521	47	256	218
	100.0%	9.0%	49.1%	41.8%
わからない／ 覚えていない	400	38	206	156
	100.0%	9.5%	51.5%	39.0%

- Q4～Q6 に関して、文化的経験の頻度別に鑑賞者タイプの分布を確認すると、いずれの文化的経験に関しても同様の傾向が見られた。「正統習慣」は、経験の頻度が最も高い区分（「よくあった」と答えた区分）でその分布の割合が最も大きく、「ときどきあった」「あまりなかった」「まったくなかった」と経験の頻度が低くなるにつれ、分布の割合

も小さくなっている¹⁵。つまり、子どもの頃の「家庭」での文化的経験の多寡と、「正統習慣」の分布割合の大きさとの間には、関連性があるといえる。このことから、子どもの頃の「家庭」での文化的経験が豊かであればあるほど、その後正統性の高い芸術ジャンルの鑑賞の習慣化に至りやすい、という傾向があると考えられる。

次に、調査票の設問「Q7.あなたが15歳の頃（中学3年生のとき）住んでいた家には、以下の物品のうち、どれがありましたか。あてはまるものをすべて選んでください。どれもなかった場合は「4 どれもなかった」を選んでください。（複数回答可）」について、選択肢「1 ピアノ」、「2 美術品・骨董品」、「3 文学全集・図鑑」ごとに、回答の集計結果および考察を以下に示す。

「Q7.あなたが15歳の頃（中学3年生のとき）住んでいた家には、以下の物品のうち、どれがありましたか。あてはまるものをすべて選んでください。どれもなかった場合は「4 どれもなかった」を選んでください。（複数回答可）」

図表 15 選択肢「1 ピアノ」に対する回答の集計結果

	全体	正統習慣	大衆のみ習慣	無習慣
全体	2995	445	1648	902
	100.0%	14.9%	55.0%	30.1%
あった	837	191	471	175
	100.0%	22.8%	56.3%	20.9%
なかった	1896	235	1063	598
	100.0%	12.4%	56.1%	31.5%
わからない／ 覚えていない	262	19	114	129
	100.0%	7.3%	43.5%	49.2%

¹⁵ 表側カテゴリー各文化的経験の頻度区分（「わからない／覚えていない」を除く）、表頭カテゴリー「正統習慣」「正統習慣なし（「大衆のみ習慣」と「無習慣」の合算）」の4×2のクロス表に対してカイニ乗検定を行った（自由度3、有意水準0.05で、カイニ乗分布Cは7.81）。（Q4）カイニ乗値＝160.9＞C。（Q5）カイニ乗値＝112.6＞C。（Q6）カイニ乗値＝41.48＞C。よって文化的経験の頻度区分間に見られる「正統習慣」の分布割合の大きさの違いは、Q4～Q6それぞれにおいて、有意な差であるといえる。また、関連性の大きさは、大きい順に、Q4 クラシック音楽、Q5 美術館や博物館、Q6 読み聞かせ、となっている。

図表 16 選択肢「2 美術品・骨董品」に対する回答の集計結果

	全体	正統習慣	大衆のみ習慣	無習慣
全体	2995	445	1648	902
	100.0%	14.9%	55.0%	30.1%
あった	406	123	196	87
	100.0%	30.3%	48.3%	21.4%
なかった	2327	303	1338	686
	100.0%	13.0%	57.5%	29.5%
わからない／ 覚えていない	262	19	114	129
	100.0%	7.3%	43.5%	49.2%

図表 17 選択肢「3 文学全集・図鑑」に対する回答の集計結果

	全体	正統習慣	大衆のみ習慣	無習慣
全体	2995	445	1648	902
	100.0%	14.9%	55.0%	30.1%
あった	1231	256	706	269
	100.0%	20.8%	57.4%	21.9%
なかった	1502	170	828	504
	100.0%	11.3%	55.1%	33.6%
わからない／ 覚えていない	262	19	114	129
	100.0%	7.3%	43.5%	49.2%

- 文化的財の有無別に鑑賞者タイプの分布を確認すると、いずれの文化的財に関しても同様の傾向が見られた。「正統習慣」は、文化的財が「あった」と回答した区分でその分布の割合がより大きくなっており、「あった」と回答した区分と「なかった」と回答した区分の間でその分布割合の大きさに差を確認することができる¹⁶。つまり、「家庭」における文化的財の有無と、「正統習慣」の分布割合の大きさとの間には、関連性があるといえる。このことから、文化的財を保有する家庭で育つほうが、その後正統性の高い芸術ジャンルの鑑賞の習慣化に至りやすい、という傾向があると考えられる。

¹⁶ 表側カテゴリー「あった」「なかった」、表頭カテゴリー「正統習慣」「正統習慣なし（「大衆のみ習慣」と「無習慣」の合算）」の2×2のクロス表に対してカイニ乗検定を行った（自由度1、有意水準0.05で、カイニ乗分布Cは3.84）。（ピアノ）カイニ乗値＝48.0＞C。（美術品・骨董品）カイニ乗値＝78.4＞C。（文学全集・図鑑）カイニ乗値＝46.2＞C。よって「あった」と回答した区分と「なかった」と回答した区分に見られる「正統習慣」の分布割合の大きさの違いは、有意な差であるといえる。また、関連性の大きさは、大きい順に、美術品・骨董品、ピアノ、文学全集・図鑑、となっている。

最後に、上記3つの選択肢について、「家庭」が保有していた文化的財の個数として集計した結果および考察を、以下に示す。

図表 18 選択肢「1 ピアノ」、「2 美術品・骨董品」、「3 文学全集・図鑑」に対する回答の集計結果

	全体	正統習慣	大衆のみ習慣	無習慣
全体	2995	445	1648	902
	100.0%	14.9%	55.0%	30.1%
どれもあった	192	63	94	35
	100.0%	32.8%	49.0%	18.2%
どれか1つはあった	1447	277	838	332
	100.0%	19.1%	57.9%	22.9%
どれもなかった	1094	86	602	406
	100.0%	7.9%	55.0%	37.1%
わからない／ 覚えていない	262	19	114	129
	100.0%	7.3%	43.5%	49.2%

- 「家庭」が保有していた文化的財の個数別に鑑賞者タイプの分布を確認すると、「正統習慣」は、文化的財が「どれもあった」と回答した区分においてその分布の割合が最も大きく、「どれか1つはあった」「どれもなかった」と、家庭が保有していた文化的財の個数が少なくなるにつれ、分布の割合も小さくなっている¹⁷。つまり、育った「家庭」が保有していた文化的財の多寡と、「正統習慣」の分布割合の大きさとの間には、関連性があるといえる。このことから、育った家庭の文化的環境が豊かであればあるほど、その後正統性の高い芸術ジャンルの鑑賞の習慣化に至りやすい、という傾向があると考えられる。

¹⁷ 表側カテゴリー各保有個数区分（「わからない／覚えていない」を除く）、表頭カテゴリー「正統習慣」「正統習慣なし（「大衆のみ習慣」と「無習慣」の合算）」の3×2のクロス表に対してカイ二乗検定を行った（自由度2、有意水準0.05で、カイ二乗分布Cは5.99）。カイ二乗値＝106.8＞C。よって文化財の保有数区分間に見られる「正統習慣」の分布割合の大きさの違いは、有意な差であるといえる。

「学校」で獲得した文化資本との関連性

調査票の設問「Q8.あなたが中学3年生のとき、以下の教科について、あなたの成績は学年のなかでどれくらいでしたか。あてはまるものをそれぞれ選んでください。」について、「音楽」、「美術」、「国語」に分けて回答の集計結果および考察を以下に示す。

図表 19 「音楽」に対する回答の集計結果

	全体	正統習慣	大衆のみ習慣	無習慣
全体	2995	445	1648	902
	100.0%	14.9%	55.0%	30.1%
上の方	485	124	252	109
	100.0%	25.6%	52.0%	22.5%
やや上の方／ 真ん中あたり	1661	231	954	476
	100.0%	13.9%	57.4%	28.7%
やや下の方／ 下の方	587	74	329	184
	100.0%	12.6%	56.0%	31.3%
わからない／ 覚えていない	262	16	113	133
	100.0%	6.1%	43.1%	50.8%

図表 20 「美術」に対する回答の集計結果

	全体	正統習慣	大衆のみ習慣	無習慣
全体	2995	445	1648	902
	100.0%	14.9%	55.0%	30.1%
上の方	363	75	213	75
	100.0%	20.7%	58.7%	20.7%
やや上の方／ 真ん中あたり	1662	260	914	488
	100.0%	15.6%	55.0%	29.4%
やや下の方／ 下の方	706	92	405	209
	100.0%	13.0%	57.4%	29.6%
わからない／ 覚えていない	264	18	116	130
	100.0%	6.8%	43.9%	49.2%

図表 21 「国語」に対する回答の集計結果

	全体	正統習慣	大衆のみ習慣	無習慣
全体	2995	445	1648	902
	100.0%	14.9%	55.0%	30.1%
上の方	690	156	389	145
	100.0%	22.6%	56.4%	21.0%
やや上の方／ 真ん中あたり	1638	218	931	489
	100.0%	13.3%	56.8%	29.9%
やや下の方／ 下の方	420	57	229	134
	100.0%	13.6%	54.5%	31.9%
わからない／ 覚えていない	247	14	99	134
	100.0%	5.7%	40.1%	54.3%

- 芸術関連教科の成績別に鑑賞者タイプの分布を確認すると、いずれの教科に関しても同様の傾向が見られた。「正統習慣」は、成績が「上の方」だったと回答した区分で、その分布の割合が最も大きくなっている。また、「やや上の方／真ん中あたり」と「やや下の方／下の方」とでは、その分布の割合の大きさに差を確認することができない¹⁸。つまり「やや上の方／真ん中あたり」と「やや下の方／下の方」の間にあると想定される獲得文化資本の多寡と、「正統習慣」の分布割合の大きさとの間には、関連性がないといえる。
- ただし、「上の方」とそれ以外（「やや上の方／真ん中あたり」「やや下の方／下の方」）とでは、「正統習慣」の分布割合の大きさに差を確認することができる¹⁹。つまりこれらの間にあると想定される獲得文化資本の多寡と、「正統習慣」の分布割合の大きさとの間には、関連性があるといえる。このことから、学校での獲得文化資本が「上の方」

¹⁸ 表側カテゴリー「やや上の方／真ん中あたり」「やや下の方／下の方」、表頭カテゴリー「正統習慣」「正統習慣なし（「大衆のみ習慣」と「無習慣」の合算）」の2×2のクロス表に対してカイ二乗検定を行った（自由度1、有意水準0.05で、カイ二乗分布Cは3.84）。（音楽）カイ二乗値＝0.63<C。（美術）カイ二乗値＝2.67<C。（国語）カイ二乗値＝0.020<C。よって「やや上の方／真ん中あたり」と「やや下の方／下の方」の間に見られる「正統習慣」の分布割合の大きさの違いは、有意な差であるとはいえない。

¹⁹ 表側カテゴリー「上の方」「それ以外（「やや上の方／真ん中あたり」と「やや下の方／下の方」の合算）」、表頭カテゴリー「正統習慣」「正統習慣なし（「大衆のみ習慣」と「無習慣」の合算）」の2×2のクロス表に対してカイ二乗検定を行った（自由度1、有意水準0.05で、カイ二乗分布Cは3.84）。（音楽）カイ二乗値＝43.4>C。（美術）カイ二乗値＝8.0>C。（国語）カイ二乗値＝33.4>C。よって「上の方」とそれ以外（「やや上の方／真ん中あたり」「やや下の方／下の方」）の間に見られる「正統習慣」の分布割合の大きさの違いは、有意な差であるといえる。

である場合、それ以外の場合に比べ、その後正統性の高い芸術ジャンルの鑑賞の習慣化に至りやすい、そういう傾向があると考えられる。

学歴との関連性

調査票の設問「Q17.あなたが最後に行かれた学校は次のどちらにあたりますか。中退も卒業と同じ扱いでお答えください。」について、回答の集計結果および考察を以下に示す。

図表 22 学歴との関連性

	全体	正統習慣	大衆のみ習慣	無習慣
全体	2995	445	1648	902
	100.0%	14.9%	55.0%	30.1%
中学校	46	3	28	15
	100.0%	6.5%	60.9%	32.6%
高校	877	89	462	326
	100.0%	10.1%	52.7%	37.2%
専門学校	351	39	199	113
	100.0%	11.1%	56.7%	32.2%
短大	280	34	155	91
	100.0%	12.1%	55.4%	32.5%
高専	43	7	22	14
	100.0%	16.3%	51.2%	32.6%
大学	1263	242	709	312
	100.0%	19.2%	56.1%	24.7%
大学院	135	31	73	31
	100.0%	23.0%	54.1%	23.0%

- 学歴別に鑑賞者タイプの分布を確認すると、「正統習慣」は、学歴区分「中学校」でその分布の割合が最も小さく、「高校」「大学」と学歴が高くなるにつれ、その分布の割合も大きくなっている²⁰。つまり、学歴の高さと、「正統習慣」の分布割合の大きさとの間には、関連性があるといえる。高い学歴を獲得している人ほど、それと同時に正統性の

²⁰ 表側カテゴリー各学歴区分、表頭カテゴリー「正統習慣」「正統習慣なし（「大衆のみ習慣」と「無習慣」の合算）」の7×2のクロス表に対してカイ二乗検定を行った（自由度 6、有意水準 0.05 で、カイ二乗分布 C は 12.59）。カイ二乗値 = 49.0 > C。よって学歴区分間に見られる「正統習慣」の分布割合の大きさの違いは、有意な差であるといえる。

高い芸術ジャンルの鑑賞の習慣化に至っている、そういう傾向があると考えられる。

まとめ

最後に、調査結果として得られた知見をもとに、正統性の高い芸術ジャンルを習慣的に鑑賞する人を増やすにあたっての、簡単な覚書をここに記しておく。

- 年代別の分布が一定である。ということは、一度習慣化してしまえばそれが生涯の趣味となることを意味している一方で、年齢を経たのちに習慣化に至る人の数が多くはないということも同時に示している（「年齢との関連性」）。つまり習慣化するかどうかの分岐は10代ないしはそれ以前の時期に存在しているということであり、「正統習慣」人口を増やすにあたっては、この時期の若年層へのアプローチが肝要といえる。
- そうした若年層へのアプローチにあたってヒントとなるのは、「家庭」で獲得した文化資本の多寡とその後の習慣化との関係である（「家庭」で獲得した文化資本との関連性）。子どもの頃に家庭空間で獲得した文化資本が豊かであればあるほど、つまり子どもの頃の文化的な経験や育った家庭の文化的環境が豊かであればあるほど、その後「正統習慣」に至る傾向にある、ということがわかっている。このことはつまり、この時期の文化芸術との接触頻度が多ければ多いほど、子どもは習慣化のほうにその分岐を進む傾向にある。ということを示している。
- 家庭での接触頻度が多いということは、①具体的なある作品や公演に感動し、「感動する」という言葉の意味を体得するチャンスが多いということであり、そしてまた②きっかけを得たその後も、文化芸術との継続的な接触が確保されているということの意味していると考えられる。そしてそのどちらもが習慣化に至るその確率を高めていると思われる。そうだとすれば、つまり①②が要因として効いているがために文化芸術との接触頻度が多い家庭では子どもたちが分岐を習慣化のほうに進む確率が高くなっているのだとすれば、それに素直に倣い、文化芸術との接触が少ない家庭で育つ子どもたちに①と②をできるだけ供給する。これが、本調査の知見から導かれる、「正統習慣」を増やすにあたっての、効果的なアプローチへの示唆である。

芸術鑑賞の習慣化についての実態調査

発行年月日 令和 7 年 7 月 10 日

執 筆 者 独立行政法人日本芸術文化振興会 企画部 基金・助成事務局 調査研究課
<https://www.ntj.jac.go.jp/kikin/artsCouncil/research.html>

発 行 独立行政法人日本芸術文化振興会 企画部 基金・助成事務局 調査研究課
〒102-8656 東京都千代田区隼町 4-1
TEL 050-1754-5895
URL <https://www.ntj.jac.go.jp/kikin.html>

* 無断複写・転載はお断りします。